

日本人と英語国民との文章構成の相違について

村田 年

The Differences in Writing Patterns between Japanese and Native Speakers of English

Japanese EFL students often have difficulties improving English reading skills. A major reason for that might come from the different paragraph writing conventions on which both languages are based. When writing an essay, English speakers tend to start a paragraph with a general idea and then provide supporting examples of the idea. This paragraph pattern is often called general-to-specific structure. On the other hand, Japanese speakers like to start with specific examples at the beginning, as if such examples were a prelude to main points, and then try to guide reader's attention gradually to the core points at the end of the paragraph. This pattern is named specific-to-general structure. The same different structures are also found in the sentence level. This may be because each language behaves on its own convention in any portion of the language. If such language-specific conventions are taught to Japanese EFL learners in a systematic way, it will help them not only improve their reading skills but also eventually find pleasure in reading English. In this paper I will present two different language behaviors first in the paragraph level and then in the sentence level, by discussing various examples. I would like to keep collecting self-explanatory examples and prepare good explanations for EFL students.

0. はじめに

日本人と英語国民の文章構成の相違を具体的にパターン化して提示し、それを意識的に学習者に教えることによって、より効率的に英語読解力を伸ばせるのではないかと筆者は考えた。その具体的なパターン化にいたる途中段階の成果を提示し、批判を仰ぎたい。

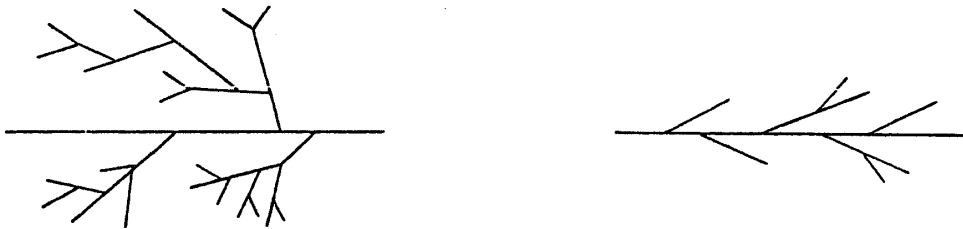
1. 日本人と英語国民の文章構成の相違の大枠

まず日英の文章構成の大枠を表わしているものとして Leggett (1975) の図を紹介する。

日本人の文章構成は枝葉、具体例など specific なことから話が始まり、それがまとまってやがて中心線へと至る。するとまた specific なことがらを紹介し、同じように中心線へと至る。そのような繰り返しによってやがて中心テーマが明らかになり結論に至る。いっぽう英語国民の場合は、話は中心テーマより始まり、そのテーマの補強として理由、説明、言い換え、実例などが示される。しかし、常にテーマ中心で、そこから大きく逸脱しないような配慮が一貫してなされる。以上の大きな傾向について具体的に検討する。

もしも上記の説明が事実であるとすれば、英文から和文への翻訳はパラグラフ内の文の順序を入れ替えたりするのが通例のこととなるであろう。ところが実際はほとんどの翻訳は文の順序が

図1. 日本人と英語国民の文章構成の違い [Leggett (1975)]



(左から右に読み進み、水平な直線が話の主流を表すものとする)

(A) 日本人の文章構成

(B) 英語国民の文章構成

—成田 (1990) より

原文の英語と同じである。これでは普通の日本人にとって翻訳文を読むのは理解も難しく、筋道を追っていくのに疲れて当然であろう。

話の趣旨は同一であるが、文の順番を大幅に変えて、英語国民的なエッセイ構成、パラグラフ構成に変えてしまった、希な翻訳の一例として『日本人とユダヤ人』(*The Japanese and the Jews*)を取り上げる。

- (1) The comparison implicit in the title of this book requires some explanation. I am the first to admit that few peoples are as fundamentally dissimilar as the Japanese and the Jews. Indeed, readers who know one or the other of these peoples intimately may perhaps object that any comparison is impossible. As a Jew born and raised in Japan, I know both the Japanese and the Jews well, and I am only too keenly aware of the difficulties involved in comparing them if the aim of the examination is to discover similarities. There are simply too few to bother hunting for them. Moreover, I believe that the only meaningful comparisons are those that attempt to find and analyze differences

—*The Japanese and the Jews*. p. 1

(*用例の下線はすべて筆者によるものである。)

英訳をみると、この本は日本人とユダヤ人との比較を行うが、これほど違いが大きく比較の難しいものはないであろう、という趣旨で第1パラグラフは始まっている。すなわち一般論から始まっているわけである。いっぽう原文では本書の第1パラグラフは次のように始まる。

- (2) もう二十年以上昔のことである。日本人K氏は貿易再開に備えて渡米した。当時はまだ対日感情の悪いころで、列車の中で、日本人とわかると集団リンチを受けかねまじき状況だった。K氏はニューヨークで、有名なアストリア・ホテルに宿泊し、出張所開設に飛まわっていたが、人びとの悪意ある態度や冷たい対応には全く神経をすりへらし、ホテルの私室だけが唯一の憩いの場所になってしまった。格式あるホテルだけに、たとえ営業上当然とはいえ、顧客へのサービスは十分だったからである。

少し落ち着くと、両隣りの部屋にいるのがユダヤ人で、しかも彼らは宿泊しているのでは

なく、ここに住んでいるのに気がついた.... (以下略) —『日本人とユダヤ人』 p. 13

第1パラグラフの第1文に日本人K氏がほとんど説明もなく登場する。少しずつK氏の人物像が明らかになってくる。しかしこのエッセイの目的については何の説明もない。ついで第2パラグラフはいきなりユダヤ人が登場する。これもほとんど説明がなく、少しずつ肉付けがなされていく。何が言いたいかの論点が少しわかってくるのは4つ目のパラグラフのあとの方でのユダヤ人の「安全にはコストがかかります。」という受け答えのことばによってである。これもそれ以上の説明はなく、小出しに示唆されただけである。やがて第1章の最後 (p. 34) にいたって初めて主題がほめかされる。ここまできてやっと日本人とユダヤ人の比較をするのが趣旨なのであろうとわかるのである。しかしそれすら明示されているわけではない。

- (3) — 思いつめたからといって、自己の生存も、自己の安全も、自己の希求も確保できない。これらのすべては、自らの手で、高いコストをかけて、保存しなければならない、というのが、二千年の体験から割り出したユダヤ人の結論であり、日本人と根本から違う点なのである。 —『日本人とユダヤ人』 p. 34

英訳では、第2パラグラフの冒頭に章の主題が示される。「安全」という重要問題に対する日本人とユダヤ人との態度の比較をする」と明示し、次に実例のほうが一般論よりわかりやすいであろうとして、初めてK氏が Mr. Suzuki として紹介される。

- (4) In this initial chapter I have chosen to begin by contrasting the attitudes of the Japanese and the Jews toward the vital issue of security. . . . Because particulars are more vivid than generalities, I shall attempt to illustrate this point with an anecdote that a friend once told me. — *The Japanese and the Jews*. p. 2

しかし、次の第3パラグラフの頭にすぐに Mr. Suzuki が出てくるわけではない。さらに一般説明があり、Mr. Suzuki を登場させる理由説明があますところなくなされたのちに Mr. Suzuki は紹介される。

- (5) Some time after the end of World War II and while anti-Japanese feelings were still running high in the United States, Japanese business concerns began sending representatives to major American cities to reestablish trade and business connections that had been severed during hostilities. One such representative was a man I shall call Suzuki—a pseudonym as common and imaginative as Smith—who was assigned to the New York area

— *The Japanese and the Jews*. p. 2

以上、個々の実例から章の最後にいたって一般的主題に導く日本人の文章構成の傾向と、まず主題を示し、次に順々にその主題を説明しつくしていく英語国民の文章構成の一般的傾向について、1つのエッセイとその英訳を見ながら説明した。次にパラグラフの構成の相違についてさらに詳しく検討する。

2. パラグラフ構成における日本人の Specific-general 型と英語国民の General-specific 型

第1章の主張と同じであるが、英語国民は General な Topic をできるだけパラグラフの頭に出し、そのあらゆる補強、すなわち理由説明、事例の提示、補足説明などを続いて行う。いっぽう日本人は、具体例などを示し、やがて自分の言いたいテーマに結びつけていく傾向が強い。

2.1 逆三角形型論理形式と三角形型論理形式

これを別の形式で説明すれば、日本人の論理形式は三角形型を取りがちであり、いっぽう英語国民の論理形式は逆三角形型になることが多い。この実例をいくつか示したい。

(6) 我が国の学術研究活動に関する情報を研究者及び国民一般に広く提供し、アカウントビリティ（説明責任）の向上と優れた研究者の確保、研究資源の効率的かつ効果的な配分、産官学の連携による共同研究や学際的な研究の促進を図るため、調査結果の一部をインターネットで一般公開します。

(7) (英訳) Certain portions of the results of this survey will be made public through the WWW for the purpose of improving accountability and ensuring we keep superior researchers, to enable efficient and effective dissemination of research documentation, and to promote joint research and interdisciplinary research through cooperation among industry, government and academia. — 「平成12年度学術研究活動に関する調査」 p. 5

(6) は文部省からすべての大学教官に配布された文書で、(7) のような英訳が付加されている。今後はホームページ上に各教官の業績一覧を掲載することにしたが、もし不都合ならば、申し出によってその個人の一覧は掲載しない、といった趣旨のことが書かれてあった。従って下線部「調査結果の一部をインターネットで一般公開します」のところが趣旨である。日本語版はその趣旨が最後にきているが、英文では最初におかれている。

(8) Bernard Malamud (1914-86) の長編第二作、*The Assistant* (1957) の主題については、既に言い尽くされている感がある。物質主義的利害、打算が跋扈するアメリカ資本主義社会に於いて、貧窮に苦しみながらも、誠実、正直、忍耐、善という規範から決して外れることのない生き方を貫くユダヤ人食料雑貨商 Morris Bober とのかかわりを通して、かつて彼の店を襲い、その後も小銭盗みや肉欲から離れられなかったイタリア人 Frank Alpine が、苦悩と自己否定を経て自己超越を果たし、生まれ変わる。その様相を描くことを通して、作者 Malamud は、金や財産といったものを超えたところにある、人間にとっての根源的価値のありようを訴えているといってよい。 — 『英語表現研究』第17号。p. 11

(9) The aim of this study is to relate native speakers' tendency to contract auxiliaries or the negative adverb to their desire to alternate between stressed and unstressed syllables. An analysis of phonological principles should provide some useful clues regarding:
(1)...and (2)... — 『英語表現研究』第15号。p. 1

(10) 円滑なコミュニケーションのための言語行動から表現を捉えるなら、ポライトネスは、どの言語にも存在する「普遍的な言語現象」といえよう。それは、特別の語彙の使用、あるいは

は、言語形式といった、狭義の、いわゆる、「敬語」の範疇にとどまらない。宇佐美(1997: 251)は、ネウストプニーとの対談で、「基本的には、他人を心地よくさせる言語行動は、全てポライトネスだ」とし、Brown & Levinson のポライトネス概念を基本観点に、運用機能の面から日本語の敬語に言及している。ポライトネスは、いわば、人間関係を円滑なものに調整する「配慮」表現として広義に捉えられよう。

本稿では、通常の言語行動の中で、話し手の受益と聞き手の立場のバランスを最も「配慮」しなければならない表現の一つである「依頼」に焦点を当て、日・英語対照分析を試みる。

—『英語表現研究』第15号. p. 39

日本英語表現学会の紀要である『英語表現研究』の最近5年間ほどの掲載論文の冒頭のパラグラフ(及び第2パラグラフ)を見てみると、ほとんどは日本人が書いたものであるが、英語で書かれた論文と日本語で書かれた論文では相当の文章構成の違いが見られた。

日本語で書かれた論文の場合、(8)に見られるように論文の主題は最初のパラグラフの最後に、あるいは(10)にあるように第2パラグラフ以降に置かれる傾向が高かったが、英語で書かれた論文の場合は(9)にあるように冒頭のパラグラフに、それも冒頭のセンテンスに示される傾向が、半分以上ではないが、相当高いと判断された。

このように同じ日本人が書いた文章でも日本語で書いた場合と英語で書いた場合で文章構成が異なるのはなぜであろうか。日本語の論文に比べて、英語の場合はトピックが前の方にくることがやや多くなるのはどうしてであろうか。ほとんど実証的な調査・検討を行っていないので、推定の域を出ないが、英語の文章構成の知識、英文を書く能力、文化・思考の制約に加えて日本語の制約が働いているのではないかと想像する。

2.2 文化による制約と言語による制約

英語で論文を書く日本人研究者は英語の文章構成の知識があり、トピック・センテンスをパラグラフの冒頭にもってこようと努力するであろう。また日本人であるから、英文を書く能力が限られていて、英語が不自由なので、回りくどく書く余裕がなく、必要なことだけを紋切り型に並べる。読み手・聞き手に唐突な感じを与えない、不快な気持ちを与えない、相手が受け入れてくれるかどうかを探りながら、といった文化・思考上の制約から離れることもできると想像される。

またいっぽうで、日本語という言語自体の文構造上の制約がパラグラフにも影響を及ぼしていると推察される。

Oi (1986) によると日本人大学生とアメリカ人大学生の作文で、General → Specific, Specific → Generalの割合は次のようであったという。

	General→Specific	Specific→General
1) 日本人が日本語で書いた場合	15.8%	73.7%
2) 日本人が英語で書いた場合	53.3%	20.0%
3) 英語国民が英語で書いた場合	70.6%	5.9%

(62)

この実験でみるとたいへん興味深いことに、日本人が日本語で書いた場合は細かな実例などから話が始まりやがて一般化が示される割合が 73.7%にもなるが、日本人が英語で書いた場合は 20.0%になってしまう。日本語という言語の制約がかなり大きなファクターになっていることは想像できるが、この点の詳しい検討は別の論文に譲るとして、センテンス単位での情報の提示順の日英語の相違について少々考察を試みたい。

2.3 英語の文単位における情報の提示順について

パラグラフ構成や1つのエッセイ全体の構成に日本語、あるいは英語といった言語の文構造が影響すると考えるのが当然であるが、日本語と英語の文構造を比較してその点を検証してみたい。

2.3.1 文の情報構造—新旧情報

英語の文の情報構造は、一般に、重要度の低い情報から重要度の高い情報へと流れ、文末の要素が最も重要度が高い情報であると言われる。(高見(1998), 久野(1978), Quirk et al. (1985))

(11) I talked with Mr. Johnson about my future career.

(12) I talked about my future career with Mr. Johnson.

(11) の場合は「文末焦点 (End-focus)」の原則によって about my future career に重点があり、「将来の進路」の相談をした、と言いたいのである。いっぽう (12) の方は with Mr. Johnson に重点があり、「ジョンソン先生」と相談したと言いたいのである。

いっぽう日本語の情報構造は、通例、より重要でない情報からより重要な情報へと流れ、動詞に強調ストレスを置かない限り、動詞直前の要素が最も重要な情報となる。

(13) 太郎は花子と京都へ行ったの？

(14) 太郎は京都へ花子と行ったの？

(13)では「京都へ行ったのか」と聞いていて、(14)では「花子と行ったのか」と聞いているのである。文末の動詞要素を除くと、「情報の流れの原則」は英語と日本語は同じように見えるが、実はそうではない。日本語の文は、ある語群の中心語は常に最後であり、さらに最後の動詞にいたるまで文意が決定しないのである。

2.3.2 VO言語 (英語) とOV言語 (日本語)

(15) John bought a book. ジョンは本を 買った.

V O O V

このように英語では「動詞+目的語」に、日本語ではちょうど逆に「目的語+動詞」になる。

2.3.3 語順と統語要素の鏡像関係 (安藤 (1986), 柴谷 (1981), 影山 (1981))

英語と日本語のように文構造が「VO:OV」のように鏡像関係をなしている言語では、統語要素の配列のすべてにおいて体系的な鏡像関係を示す傾向がある。VO言語はすべて「主要部+補足部」の語順を取り、OV言語はすべて「補足部+主要部」の語順を取ることを原則とするのである。ここで「主要部」と言っているのは文法構造上の「中心語」であって、意味上中心となっている語という意味ではない。例えば with a pen は with によって前置詞句(あるいは副詞句、

形容詞句) になるので, これを主要部と呼ぶことにする.

	VO言語		OV言語
(16) 前置詞 + 名詞	<u>with</u> <u>a pen</u>		<u>ペン</u> <u>で</u> 名詞 + 後置詞
	1 2		2 1
(17) 接続詞 + 文	<u>When</u> <u>John comes</u>		<u>ジョンが来る</u> <u>と</u> 文 + 接続詞
	1 2		2 1
(18) 助動詞 + 本動詞	He <u>will</u> <u>come</u> .		彼は <u>来る</u> <u>だろう</u> . 本動詞 + 助動詞
	1 2		2 1
(19) 名詞 + 関係節	<u>the book</u> <u>which John wrote</u>		<u>ジョンが書いた</u> <u>本</u> 関係節 + 名詞
	1 2		2 1
(20) 属格 + 名詞	<u>Mary's</u> <u>sister</u>		<u>花子の</u> <u>妹</u> 属格 + 名詞
	2 1		2 1
(21) 指示詞 + 名詞	<u>this</u> <u>man</u>		<u>この</u> <u>男</u> 指示詞 + 名詞
	2 1		2 1
(22) 形容詞 + 名詞	<u>white</u> <u>wine</u>		<u>白い</u> <u>ワイン</u> 形容詞 + 名詞
	2 1		2 1

VO言語は「主要部 + 補足部」(1 + 2) の語順を取るのが原則であり, OV言語である日本語では「補足部 + 主要部」(2 + 1) を原則とする. 上記で見ると日本語には例外がないが, 英語では (20), (21), (22) が例外的である. すなわち, 英語では前置修飾は例外である. それはマレー語のようにすべて「主要部 + 補足部」の構造を取る言語を見るとわかる. (安藤 (1986)) 従って英語の典型的な修飾形態は後置修飾である.

2.3.4 修飾構造と陳述の帰結

先に述べたように英語の典型的な修飾構造は後置修飾であり, 日本語は前置修飾である.

(23) a cat that killed a rat

(24) ネズミを殺した猫

このように英語では常にトピック及び帰結が冒頭にあり, 日本語では最後に来るのが原則である. これはまさにそれぞれの言語の語順とパラレルである.

(25) a cat that killed a rat that ate cheese

(26) チーズを食べたネズミを殺した猫

(27) a cat that killed a rat that ate cheese that was rotten

(28) 腐っていたチーズを食べたネズミを殺した猫

英語の場合はトピック (cat) がまず示され, その説明がなされていく. この語順は文のどの部分を取っても同様である. rat を見ると a rat that ate cheese となっている. 日本語では最後にいたるまで帰結がない. 最後にいたるまで何の話しをしているのかわからない状況である. これは文の場合も同じである.

(64)

(29) The flowers are most beautiful at this time of the year.

(30) 花は1年のうちの今頃が最も美しい。

英語では、the flowers と提示されたトピックはできる限り早く「最も美しい」との帰結が示され、続いて細かな制約やら説明やらが次々と付加されていく。日本語は最初に示されたトピックの帰結は文尾まで行かないとわからない。そこでいろいろな工夫をして早く帰結がわかるような手が施される場合もある。上の例では「花が最も美しいのは1年のうち今頃だ」とすると帰結が早目に見える。複文になるとその違いはさらに明きらかとなる。

(31) Diligence continues to be one of the virtues the value of which every child is taught in school.

(32) 勤勉は、今でもその価値をすべての子供が学校で教えられる美徳の1つである。

英語においては文意が文頭に近いところで決まるが、日本語は、文頭にトピックを出すものの、帰結は文末まで保留される。センテンスが長くなればなるほどその相違点はいつそうはっきりわかる。さらに用例を見られたい。

(33) You will also find a fax form to request additional information. Please use this form if you would like samples of Bookworms readers, a full catalog of the series, or a free teaching guidebook on using graded readers in your classes.

(34) また、ブックワームズのリーダーの実物見本やブックワームズの全タイトルを紹介しているカタログ、リーダーを教室でご利用いただくときの教師用ガイド・ブックをご希望の際には、この用紙をご利用の上、ファックスにてご返信下さい。

—オックスフォード大学出版局のパフレット (2001. 4. 25)

以上見てきたように文単位の構造とパラグラフの構造は、英語においても日本語においても平行している。ということは、英語においては文においてもパラグラフにおいてもトピックと帰結を冒頭で示す傾向が強く、日本語の場合は逆にトピックは冒頭に出るが、帰結は最後に来る。時にはトピックと帰結との関係を見やすくするためにトピックを帰結の近くに持ってくることもあっても理解できるであろう。

3. 日本語の「起承転結」の論理形式と英語の「起承結」の論理形式

日本語の文章は建前上は「起承転結」を模範的構造としてきたが、現代の文章は必ずしもこれを守っているとは考えられない。その話題は置いておいて、日本人の文章構造では「転」が大きな特徴をなしていると言える。これは説明効果を狙っている面もあるが、論点を散らして読者の判断に委ねる意味もあろう。文章ではないが次の例をみることにしたい。

(35) E 1 : 小林さん、子供がいますか。

K 2 : はい、息子が一人います。

E 3 : ああそうですか。

F 4 : あのう、歳はいくつですか？

K5 : ええとね, 2月に4つになります。

F6 : What ?

—Hinds (1986)

これは日本語の先生である小林先生に授業が終わったあとでアメリカ人の学生たちが個人的な質問をしているところであるが、最後のところで小林先生は話題が子供のことに移ったと思って答えたが、アメリカ人の学生たちは小林先生のことを聞いているつもりだったので、日本語でのやりとりが、驚きのあまり、思わず英語になってしまったのである。

これは話題転換に関する日英語の相違を表している適例である。日本人は新たな話題に次々と移って行き、特に関心が高い話題があればもう一度戻ればよいといった傾向がある。これは相手の興味・関心がどこにあるかを探る目的もあって話し相手への配慮がその理由のひとつとも考えられる。いっぽう英語国民は、話題転換には相手にそれとわかるサインを出すことに加えて、同じ話題に集中し、その話題がなんらかの結論を得るまでは話題転換をしない傾向が見られる。次の4においてさらに多くの用例を見てみたい。

4. テーマの移動と結束性

日本人は therefore 型思考を取り、and, or, forなどを多用し、○→○→○→◎のようにテーマが移動していった核心の中心テーマ (Topic) に至るわけである。これは別のいい方をすれば、点的論理を取り、捨て石を2つ、3つと打ち、次第に問題を切り出していった最後にいっきに決しておしまおうというやり方である。いっぽう英語国民は because 型思考を取る。

◎←○←○←○となり、Topic がはじめに示され、常にその Topic に戻っていく、言い換えればすべてが Topic の説明であり、Topic に従属している。Topic の説明が終わったところでパラグラフが終わるわけで、パラグラフの終わりは明確である。日本語ではパラグラフの切れ目はそれほど明確でない場合が多々見られるのは上記の思考形態とパラグラフ構成の相違からきていると言えるであろう。

4.1 テーマの移動

やや古い資料であるが、現代日本語の模範のひとつと言われた『朝日新聞』の「天声人語」からいくつかの用例を取ってテーマの移動を示してみたい。「天声人語」はテーマにひねりがあり、途中で話題転換があり、外国人にとっては話題についていくのがやや困難で、外国人記者クラブでも評判は芳しくなかったと聞いているが、話題が大きく転換するエッセイは年とともに少なくなってきたようである。(英訳の場合は最重要トピックをタイトルとして掲載して読み始める前に何について書かれているかを明示することによってテーマ移動に伴ういらいらは回避されている。)

(36) 電車に高齢の女性が乗ってくる→若者たちはだれも立たない→高齢者に気がつかないのだから→カンボジアでのボランティア活動の本を読んだ→ボランティア休暇制度の提唱→頼もしい若者もいる。(結局は頼もしい若者もいる、と結んでいる。) —「天声人語」1994. 4. 3

(37) 雌の羊が焼かれて死ぬ→残忍な行動で人や社会への基本的信頼感がゆらぐ→BBCは週

(66)

に一度はよいニュースを伝えるとのこと→ それに賛否両論がある→ やはりニュースはあるがままに。現実を知り得る社会がいい。 — 「天声人語」1994. 4. 20

(38) 「最近のことばかり」として。ダグラク・ラミス氏の日本国憲法に対することば→ マンデラ大統領の就任演説のことば→ 日本の満州占領についての後藤田元副総理のことば→ 加藤周一氏の失言についてのことば→ 精神科医の渡部正行氏のいまの子供についてのことば→ 英文学者の西村孝次氏の八十過ぎての心境（最近1ヶ月の発言である以外に何のつながりもない。） — 「天声人語」1994. 5. 30

4.2 結束性

おおざっぱに言うと日本語の文章に比べて英文はいろいろな点で結束性が高いと言えるであろう。それゆえ結束性の絆をたどって意味をつかむことができる利点もある。

4.2.1 書名と章のタイトル

(39) 書名：日本人とユダヤ人

翻訳：The Japanese and the Jews

(Contrasting the Attitudes of the Japanese and the Jews toward Vital Issues)

冒頭で取り上げた『日本人とユダヤ人』とその翻訳をもう一度取り上げる。書名は「日本人」と「ユダヤ人」がただ並んでいるだけである。翻訳もそうなっている。一点に集めずに焦点は2つになっている。翻訳の本文を読み始めるとさっそくに（ ）の中の表現に出くわす。これは1点 Contrasting に集中する形になっている。おそらくは翻訳者はこのような書名にしたかったにちがいない。これでは座りが悪ければ Contrasting を取って、The Attitudes of the Japanese and the Jews toward Vital Issues としたかったであろう。日本語のタイトルとしてはくどすぎる感じもあるが、英語ではこのようにタイトルにかなりの意味を背負わせるのは通例のことであろう。

(40) 第1章のタイトル 原著：安全と自由と水のコスト

翻訳：The Cost of Security

第2章のタイトル 原著：お米が羊・神が四つ足

翻訳：Animals Sacred and Profane

次に各章のタイトルを見ると上のようになっている。英語の方はいずれも一点に集まるようになっているが、日本語のタイトルは焦点がやや定まらない、自由な形になっている。第1章のタイトルは3つがすべて「コスト」にかかっていくのであるが、形は「安全」「自由」「水のコスト」が並んでいてゆるいとも言える。第2章のタイトルも、英語は1点 Animals に集中するが、日本語の方は2つに分かれている。さらに説明を加えないと意味がわからない。霧がかかっているようにかすんでいることばが少しずつ解明されてわかってくるのが日本語の通常の形式かも知れない。

4.3.2 時制の支配による結束性：過去圏

英語のパラグラフが同じ時制によって統括される傾向を見てみたい。パラグラフが現在時制で

始まった場合、パラグラフの終わりまで現在時制が続くこともあり、途中で過去時制に変わることもある。しかし、過去時制で始まった場合はパラグラフの最後まで過去時制で一貫する傾向がかなり多くの場合に見られる。すなわち、過去圏に入ると、その視点からすべてを見ることになり比較的そこから抜け出しにくくなる。

(41) Ever since Pearl Harbor, it has been United States policy to maintain a policy of active engagement around the world. By developing a series of strategic assets in each part of the globe, America's strategic planners hope to prevent any hostile power from ever again launching an attack against the United States. After World War II, communism was considered the most dangerous force threatening the United States. Consequently, America's planners strategically supported particular countries in order to contain communism.

In Western Europe, the NATO alliance was established to prevent the Soviet Union from expanding westward. West Germany and Great Britain became America's closest allies. In order to contain Communist China, the United States built up Japan, South Korea, Thailand and Indonesia. In the Middle East, Saudi Arabia and Israel became America's most important strategic assets. They helped protect vital transportation facilities (such as the Suez Canal) and American oil interests from the Soviet Union and also against Muslim fundamentalists. In return for their strategic assistance, America's allies were provided generous military and technological assistance, along with free access to the American market.

Most of the time, America's strategic and business interests are in agreement. The American elite believe what is good for American corporations operating in the global economy is also good for America (free trade, direct investment, healthy profits). America's transnational corporations (Ford Motor, Coca-Cola, Motorola) have invested billions of dollars overseas in production plants and distribution networks. As a result, the global marketplace is flooded with American products (fast food, videos, computer software)

—*Newsworld 2001*. p. 25

最初のパラグラフは現在時制で始まり、途中から過去時制になっているが、2番目のパラグラフは過去時制で始まり全体が過去時制になっている。このように過去時制の圏内に入るとそのまま過去時制が続いていくことが多い。日本語のように現在時制と「…た」形とが入り乱れる形態は普通ではない。「時制の一致」という文法用語には問題があるかも知れないが、過去圏においては一般的真理でも過去時制で表現されることがかなり多い。3つ目のパラグラフは全体が現在時制になっているが、現在時制で統一しようという締め付けは過去時制ほど強くはない。一般的に時制によるパラグラフの統括という意識が英文構成にあることに注意したい。

さらにわかりやすい用例を1例追加したい。

(42) One day I was called to the office of my professor who was my thesis advisor. I hur-

(68)

ried to his office and opened the door. The professor was smoking and I saw two books on the desk in front of him. He told me that I could borrow them, for they would be a great help for my thesis. I felt very happy, thanked him for his kindness, picked up the books, and went out of his office, telling him that I would surely enjoy reading them for my thesis.

ある日私は卒論の指導教授の研究室へ呼ばれた。急いで研究室へ行き、ドアをあけた。教授はタバコをくゆらせている。前の机の上に2冊の本が置いてある。教授は、「その本を貸してあげてもよい、君の論文の参考に大いになるよ」と言う。私は嬉しくなり、教授に礼を述べ、本を受け取って、「きっと私の論文のためになります」と言って研究室を出た。

— 一色 (1978)

用例の英文は13ある動詞のすべてが過去形であるが、対応する和文は英文法式に言えば、現在形と過去形が入り交じっている。いわゆる時制の一致がないから当然とも言えるが、本動詞も現在形が自由に用いられている。この現象について一色 (1978) は次のように述べている。

これ (上の英文) を日本文とする場合に、(1)・・・(13)の動詞 (英文の13個の動詞) を英語のまま過去形にすると、実におもしろくない日本語となる。しかし本来の日本語のように過去と現在をまじえてみると、自然な生々とした日本語になる・・・日本語らしい表現には、過去と現在が混じってうまくとけ合っている。この場合の現在形を「歴史的現在」と英語風に説明する人もあるが、それだけでは納得がいかない。私の知っているかぎりの理論では割り切れない、日本語の動詞使用法の自然な姿である・・・ — 一色 (1978: 83-4)

このような日本語を用いている日本人にとっては英語の過去圏の締めつけはかなりきついものと考えてよい。いっぽう英語国民にとっては過去時制で統一するといった感覚はなく、無意識のうちに行なっているのであろう。

4.3.3 時の副詞 (句・節) の支配による結束性

(43) In the 1950s life was simpler. The American economy was dominated by a small group of large corporations—General Motors, Westinghouse Electric, Texaco. Many employees worked for the same corporation all their lives and young people dreamed about having their own four-person family, a home in the suburbs and a station wagon. American companies manufactured most of their products in Detroit, Chicago and other industrial centers across America. —*Newsworld 2001. p. 20*

文頭における副詞句、特に時の副詞句はその文全体にかかる。すなわちその文の枠組を決めて、全体を統括することが多い。パラグラフの場合も同様にパラグラフの冒頭の副詞はそのパラグラフの時間的枠組 (ときには場所的枠組) を規定し、最後までその枠組から出ないで議論する傾向がある。その枠組から出るときは必ず明示的なサイン (別の副詞句) が出される。しかし優れた文章はパラグラフの途中での枠組の転換を避ける。このことを知っていて、意識的に枠組を押さえて読む習慣をつけると英文がたいへん読みやすくなり、読みの速度が速くなるであろう。

5. 日本人の表現形式の reader-responsible と英語国民の表現形式の writer-responsible

日本語は、いくつものテーマ、観点を散らしておいて、それぞれの長所・短所も説明し、あとは読者の判断に任せる式の文章が、程度の差はあるものの、相当多く見られる。いっぽう英語では、ことばを尽くして伝えようとする傾向が強い。

英文においては論理の重要な単位はパラグラフで、これが論理展開の要、決め手となる。ある一定量の文章の中でできる限りの説明を尽くそうとする。ところが日本語では段落は単位としては軽い。○→○→○といった表現形式を取るためどこで切ってもそれほど大きな違いはない。段落はこのへんでちょっと休むか、といったぐらいの意味の場合も見受けられる。

むしろ論理・思考の重要な単位は語、句、文である。優れた語句を散りばめて、その中のあるものを受け入れて発展させるのは読者に委ねられる。点的思考である。

5.1 奥付における著作権の記述

(44) The right of R.R.K. Hartmann to be identified as author of this work has been asserted by him in accordance with the Copyright, Designs and Patents Act 1988.

All rights reserved; no part of this publication may be reproduced, stored in a retrieval system, or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical, photocopying, recording, or otherwise without either the prior written permission of the Publishers or a licence permitting restricted copying in the United Kingdom issued by the Copyright Licensing Agency Ltd., 90 Tottenham Court Road, London W1P 0LP

— *Teaching and Researching Lexicography*

一例として本の奥付の著作権の記述を見ると、上の例のように英語ではすべてを Writer の責任で説明し尽くそうとする。くどすぎても論理の飛躍がないように努める。許可を得なければならない項目も問合せ先住所もきちんと書いてある。

(45) 本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは著作権法上での例外を除き禁じられています。 — 『英語の辞書と辞書学』

日本の本は一般に上記のように簡略に書かれている。日本の文化では読み手が常識的に空白を埋めて読むのは当然であるとされる。

5.2 日本人の bi-directional pattern と英語国民の linear pattern

日本人の表現形式：For → Against → For → Against → For

英語国民の表現形式：For —————→ For

Against —————→ Against

— Oi and Kamimura (1997) より

英語国民の表現形式では、ある提題にいったん賛成すると、その人の頭の中の一部に反対意見があっても、反対意見はすべて抑えてしまつて賛成で終始一貫議論を進めることが常道である。

日本人の表現形式では、賛成ではあるが一部条件付き反対が許されるところがあり、上のような

For→Against→ For...の表現形式が英語に比べて相当に多いようである。

Oi (1999) において、Do you think TV commercials should be banned totally? とか Do you think it is better to live in an urban city? or do you think it is better to live in a rural town? といった賛成も反対も同じように起こりうる質問に答えるエッセイをアメリカ人学生と日本人学生に書かせた結果を見ると次のようになっている。

For→Against→ For 型：アメリカ人学生 6%, 日本人学生 25%

やはり英語国民の論説文は論旨が終始一貫しているものとして読んでいくと読みやすくなるであろう。

以上、英語国民と日本人の表現形式の相違点という観点から見てきたが、これをさらに多くの用例で整備して、英語リーディングクラスの指導に意識的に取り込み、学生の読解力向上に役立つかどうかを見てみたい。

* 1. 拙論をまとめるにあたり大井恭子氏の論文から多くの知見を参考にさせていただいた。

ここに記して謝意を表したい。

* 2. 拙論は、日本英語表現学会第30回大会（2001年6月22日、北海道東海大学）において発表した論文に加筆・修正を施したものである。

参考文献

- 安藤貞雄. 1986. 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店.
- Hinds, J. 1980. Japanese Expository Prose. *Papers in Linguistics* 13.
- . 1983. Contrastive Rhetoric: Japanese and English. *Text* 3 (2).
- . 1987. Reader Versus Writer Responsibility: A New Typology. Connor, U. and R. B. Kaplan, ed. *Writing across Language: Analysis of L2 Text*. Addison-Wesley.
- 一色マサ子. 1978. 「日英語表現構造の比較」『日英語の比較』（現代の英語教育—8）研究社出版.
- 影山太郎. 1981. 「日英語の鏡像関係」『言語』10巻12号.
- Kobayashi, Hiroe. 1984. Rhetorical Patterns in English and Japanese. *TESOL Quarterly* 18, No. 4.
- 國廣哲彌. 1978. 「日英両語比較研究の現状」『日英語の比較』（現代の英語教育—8）研究社出版.
- 久野暲. 1978. 『談話の文法』大修館書店.
- Leggett, A. J. 1975. Notes on the Writing of Scientific English for Japanese Physicists. 『Journal の論文をよくするために』増訂版. 日本物理学会.
- 宮川喜代江. 1996. 『日本語らしい日本語への翻訳』近代文芸社.
- 成田真澄. 1999. 「英文作成支援ツール“Writer's Helper”の試作」『先端的言語理論の構築とその多角的な実証—ヒトの言語を組み立て演算する能力を語彙の意味概念から探る』神田外語大学.
- Oi, Kyoko. 1986. Cross-cultural Differences in Rhetorical Patterning: A Study of Japanese and English. *JACET Bulletin*. No. 17.
- , and Taeko Sato. 1990. Cross-Cultural Rhetorical Differences in Letter Writing: Refusal Letter and Application Letter. *JACET Bulletin*. No. 21.
- , and Taeko Kamimura. 1997. A Pedagogical Application of Research in Contrastive Rhetoric. *JACET Bulletin*. No. 28.
- . 1999. Comparison of Argumentative Styles: Japanese College Students vs. American College Students—An Analysis Using the Toulmin Model. *JACET Bulletin*. No. 30.
- , and Taeko Kamimura. 2000. A Search for the Feedback That Works for Japanese EFL Students: Content-

- based or Grammar-based. *JACET Bulletin*. No. 32.
- Quirk et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Sakamoto, N. 1980. *Polite Fictions*. 金星堂.
- 柴谷方良. 1981. 「日本語は特異な言語か？」『言語』10巻12号.
- 高見健一. 1998. 「第Ⅱ部 情報構造と伝達機能—省略, 後置文, 数量的遊離」『談話と情報構造』(日英語比較選書一②) 研究社出版.
- 外山滋比古. 1975. 『日本語の論理』中央公論社.

用例資料

- 朝日新聞論説委員室編, 朝日イブニングニュース訳. 1994. 『天声人語 '94夏』Vol. 97. 原書房.
『英語表現研究』第15号, 1998; 第17号, 2000. 日本英語表現学会.
- Gagne, Wallace and Haruo Kizuka. 2001. *Newsword 2001*. Macmillan Languagehouse.
- Hartmann, R.R.K. 2001. *Teaching and Researching Lexicography*. Pearson Education.
- 南出康世. 1998. 『英語の辞書と辞書学』大修館書店.
- 文部省国立情報学研究所. 2000. 「平成12年度学術研究活動に関する調査」
- イザヤ・ベンダサン. 1971. 『日本人とユダヤ人』角川書店.
- Ben-Dasan, Isaiah (Translated by Richard L. Gage). 1972. *The Japanese and the Jews*. Kenkyusha.